



TITLE:

皮膚紋理と真皮との形態学的関連
について(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

岡島, 道夫

CITATION:

岡島, 道夫. 皮膚紋理と真皮との形態学的関連について(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1973, 2: 48-48

ISSUE DATE:

1973-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162440>

RIGHT:

皮膚紋理と真皮との形態学的関連について

岡島道夫（東京医科歯科大・医・法医）

皮膚隆線の minutiae の本質を追求する 目的で真皮との関係を形態学的に調べることを計画した。ヒト標本とサル標本とでは、研究の対象において有利な条件と不利な条件がそれぞれ異なっているので、サル標本における有利な条件を利用して研究を行ない、つぎの成果をえた。

1) 生の皮膚標本では、Horstmann の方法 (1952) を用いて、真皮と表皮を分離した標本を作成した。

2) フォルマリン固定標本では、岡島が今回考案した方法（詳細は原著発表のときにのべる）により半透明の標本を作成した。

所 見

サルの多くの種類では、ヒトと異なり手掌や足底の真皮の汗腺溝 (groove, Drüsenleisten) に一致してメラニンの生成がみとめられる。上記の標本を観察すると、隆線と真皮の構造との関係が極めて明瞭に把握できる。たとえば皮膚表面が荒れていてプリントや直接の観察が困難であっても、隆線の正確な性状を知りうる事が明らかとなった。この方法を用いると、minutiae の terminal や fork の識別が正確に行なえる。このような観察は、おそらく今まで記載されていないのではないと思われる。

考 察

すでにヒトのプリントについて、minutiae の遺伝性や部位による特徴の差に関して岡島が報告しているの

で、これらの点をサルの所見と結びつけて追求してゆくと、隆線形成のメカニズムがある程度開明できるかもしれない。

ニホンザルの染色体研究

平井百樹（東大・理・人類）

ニホンザルの染色体数は $2n=42$ で、常染色体は13対の次中部着糸型染色体、6対の中部着糸型染色体、1対の明瞭な第二次狭窄を有する染色体よりなる。性染色体のうちX染色体は大型の次中部着糸型、Y染色体は極めて小型の次中部着糸型染色体である。

本研究は、これらの染色体の形態における個体差の有無を調べることを目的とした。

方 法・材 料

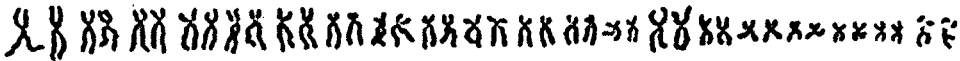
ヒトの末梢血培養法を応用した。ニホンザル雄32頭、雌8頭。その他タイワンザル、カニクイザル、アカゲザル、ブタオザル各2～3頭。

結 果

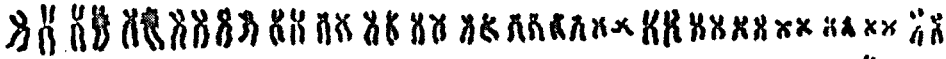
ニホンザルの雄において、Y染色体の短腕の長さに変異が見られた。Y染色体は小型であるため、正確な形態はとらえにくい場合が多いが、短腕がほとんど無いように観察されるものから中部着糸型に近いものまで存在した。この変異の生物学的意義は不明である。

マカ属の4種（ニホンザル〔♂〕、タイワンザル〔♂〕、ブタオザル〔♂〕、アカゲザル〔♀〕）について染色体の比較研究をした結果を第1図に示す。形態のうえからは4種とも極めて類似している。そこで更に、新

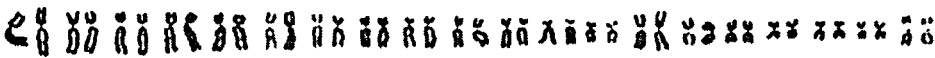
M. fuscata f.



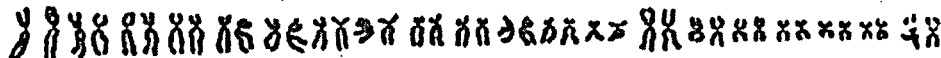
M. fuscata y.



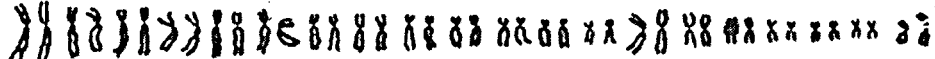
M. cyclops



M. nemestrina



M. mulatta



第 1 図